

氏 名	宮 本 雅 明 みやもと まさ あき
学位の種類	工 学 博 士
学位記番号	工 博 第 643 号
学位授与の日付	昭 和 55 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	工 学 研 究 科 建 築 学 専 攻
学位論文題目	近代日本の高等教育施設に関する史的研究 —明治期における文部省営繕組織の建築活動をめぐって—
論文調査委員	(主 査) 教 授 川 上 貢 教 授 巽 和 夫 教 授 西 川 幸 治

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は我国における高等教育施設の成立と展開の過程について、文部省営繕組織の建築活動を追跡するなかで解明しようとするものである。論文は緒論、序論、三篇七章および結論からなり、各章の内容の概要は次の通りである。

緒論は研究の目的、対象とする高等教育施設の概念、時間枠そして本研究の近代建築史研究上における位置づけを述べ、本文各章の概要を述べている。序論では、明治前期における高等教育機関の系譜をたどりながら、それらの教育施設の変遷を跡づけ、安定した高等教育施設が成立する以前の一般的状況を考察する。

第一編は高等教育施設の成立と展開の実際を担当した文部省営繕組織の変遷と活動の仕組みについて考察している。まず、第1章で、明治4年に設置された文部省会計課に出発し、明治33年に大臣官房建築課が設置されるまでの、営繕機構の変遷を追跡して、官制上の設計組織の成立時期が、明治23年の会計課建築掛の設置に求められることを明らかにしている。次に、大臣官房建築課設置以降、大正7年の高等教育機関の拡張政策の実施による営繕組織の拡張に至るまでの変遷をあとづけ、とくに明治40年、東京、京都両帝大に営繕組織が設置されたことで、機構と人員の構成に大きい変化をもたらしたことに注目している。この明治40年を境とする前後の時期における営繕組織に属する技術者の経歴、在籍期間と活動歴を紹介し、組織陣容の変化を分析している。

第2章で文部省営繕組織の活動体制を考察しており、文部省直轄学校新設工事における計画プロセスを検討し、明治中期と後期では計画プロセスに相違が見られ、企画立案、設計、施工監理の全工程を中期では本省組織が担当しているが、後期には企画、立案を本省、設計、施工監理を現地の出張所が担当したことを明らかにしている。

第2編は明治19年の「中学校」令にもとづいて、全国で5か所に設置された高等中学校の施設を取り上げ、明治中期における高等教育施設の成立過程を考察している。その第3章で草創期の文部省営繕組織の指導的技術者であった山口半六と久留正道の二人の経歴、文部省入省後における事蹟を明らかにし、兩人

の指導的役割に相違のあること、その理由として文部省営繕組織の直轄学校建設活動に占める位置と性格の変容に負うものであることを指摘している。第4章では高等中学校5校の創立事情、建設経過を紹介し、各校の敷地の規模、建物の構成、配置、構造および意匠そして経費を比較検討している。そして、これら一連の高等中学校の計画・建設過程は明治中期における高等教育施設が模索され完成へ至る過程であったことを明らかにしている。

第3編は明治後期の高等教育施設の展開過程を考察しており、文部省営繕組織に属する技術者について個別に事蹟を跡づけ、その担当した教育施設の内容を紹介する。次に各技術者の意匠処理の傾向を論じている。第5章で山本治兵衛、第6章で中島泉次郎、新山兵四郎、白岩正雄を取り上げ、各自の経歴、文部省技師、帝大営繕部技師としての活動歴を紹介し、担当した建築諸例にみる意匠の特色と年代的变化を論じている。次に第7章では明治36年の「専門学校令」の公布と前後する時期に全国に多数の医学、実業専門学校が新設されており、これら新設校諸例の施設について、敷地、建物の規模、構成、配置にみる傾向を論じ、明治中期に成立を見た平面形式と意匠が後期にも基本的に踏襲されているが、多様な展開を見せて行く過程のなかに位置づけられることを明らかにしている。

結論として、これまで学校建築史のなかで初等、中等教育施設と混じて論ぜられるにすぎなかった高等教育施設が本研究によって史的過程を跡づけられ、帝大と専門学校、中央と地方という二重構造をもちながら定形化の道を歩み、そのモデルとされる高等教育施設は明治中期の高等中学校5校の建設過程において完成され、更にその後成立を見た学校建築一般モデルの成立に大きく影響したことを推察している。次に地方における近代建築の出現と発達を論ずるとき、明治中、後期の高等教育施設の大半が地方に所在し、それらの建物の構造と意匠、担当した技術者の活動が重要な役割を果たしたことを強調している。そして文部省営繕組織の実態を機構と活動の両面から解明し、技手層出身の中堅技術者が文部省営繕活動のなかで大きな比重を占めたことを明らかにし、官庁営繕機構の構成、活動の史的変遷の一環として位置づけている。最後に、大正期後半以降における高等教育機関の大拡張にともなう高等教育施設の展開の様相を概観し、今後の研究の方向と課題に論及している。

論文審査の結果の要旨

我国の明治以降における高等教育機関の学制に関してはすでに成立と展開の過程が跡づけられ、日本近代教育史のなかで確たる位置を占めている。しかし、これらの高等教育が展開された場である建築施設とその施設群より構成される空間即ち高等教育施設に関しては、これまで断片的に取り上げられていても、その成立と展開の過程を系統だてて跡づけた研究は未だ見られない。本論文は今日の大学キャンパスの源流である旧制の高等教育機関の施設に着目して、それらが一般的に安定した形で成立をみる過程と全国的な規模で展開する過程を、それらを生み出した文部省営繕組織の活動を追う中で具体的に解明したものである。得られた成果の主なもの次は次の通りである。

1. 高等教育施設の設計組織であった文部省営繕組織の実態を、その成立経過と技術者構成に主眼を置いて考察し、組織の起源と輪郭を明らかにしている。次に組織内部の構成と技術者陣容を在籍期間と階層によって分類し、活動の実際は組織の草創期と確立発展期のあいだで相違が見られ、とくに後者では中堅

技術者出身の無名の技師層によって支えられていたことを明らかにしている。

2. 明治中期の草創期における文部省管轄の主要な工事として、明治19年設置の5か所の新設高等学校を挙げることができ、その全プロセスは文部省技師山口半六と久留正道の手を経たものであった。それに対して明治後期の高等教育施設の新設工事では基本計画の立案は文部省建築課長の下で決定し、個別建物の設計図書は現地の文部省出張所長の責任で作成し実施に移された。つまり、建物の意匠的創面は個別技術者の個性に負うところが大きいことを明らかにしている。

3. 明治中期における高等教育施設は、山口と久留の手になる高等学校5校の建設過程で、建物の配置、平面、構造および意匠の理想が实际的に模索され、5校のうち最もおそく計画・実施された四高において経済性、快適性そして優れた意匠という課題の解答を見出したことを明らかにしている。

4. 明治後期の高等教育施設の展開過程について、それを支えた技術者の側からの考察と具体的事例を取り上げ建物配置方式、構建物の種類、規模、構造、意匠等の考察を行い、明治中期との変化に留意しつつ、各校間の差違の要因と特色を明らかにしている。まず、後期を代表する技術者として山本治兵衛、中島泉次郎、新山兵四郎、白岩正雄の四人を挙げ、文部省入省前後の活動歴を発掘し、担当した文部省直轄学校のうち地方に所在するものの工事に、彼等が占める比重が極めて大きく、それぞれ独自の判断でもって建物の意匠を生み出したこと、そして明治中期に山口、久留が追い求めた理想としての禁欲的な飾らない意匠から、後期に入ると古典様式を加え装飾化が増進したことを実証した。次に、建物の配置と平面計画では地方に新設された高校、専門学校において並列型と新中庭型を採用し機能性が重視されるが、各帝大と東京所在の高専諸校では旧来の中庭型を採用し、外観意匠が重視され両者の間に著しい対照を見せており、高等教育機関のあいだの格と伝統、中央と地方にもとづいた二重構造の反映が見られることを明らかにしている。

以上要するに本論文はこれまで系統だった考察を欠いていた高等教育施設の成立と展開の過程を明らかにし、学校建築史上に位置づけると共に日本近代建築史の研究進展に多くの新知見を提供しており、学術上、実際上寄与するところが少なくない。

よって、本論文は工学博士の学位論文として価値あるものと認める。